

## 大阪大空襲のこと

影山廣子（当時、大阪市在住、7歳頃の話）

小学校1年生が終る3月、大阪大空襲にあいました。毎晩毎晩、警報が鳴ると、家を出て電車道の脇の歩道に掘った共同の防空壕に避難しました。パジャマに着替えることなく、いつでも飛び出せるよう枕元にはコートと防空頭巾、カバンを置いて……。毎晩のように伝えられるラジオの戦況放送「敵機福井県をのぞく、敵機福井県をのぞく」が恐ろしく、隣の家を伺いのぞいていいのかなと子供心に恐ろしく、でも、こわいものみたさの心理からか、ほとんど毎晩のように聞いていました。空襲最終日はB29が低空飛行で焼夷弾を次々と落として……。操縦士と目が合ったかなと錯覚する位の近い距離感の中、壕へ飛び込み、私は助かりました。外では道路を逃げる足音がすごく、お一人が中に入れてくれと入口の戸を激しくたたかれましたので、おじさんが戸を開けると、女性がバケツ一つを持って入ってこられた時、同時に大人の頭程ある火の玉が飛び込んできてびっくりしました。みんなで消しました。

夜が明けて外に出ると、まあ焼け野原。チンチン電車は鉄骨のみでブスブスとまだ燃えていました。大阪港区境川の橋の上に避難しました。母と妹が燃えている家へ行って、少しでも物が出せないかと、私は一人、絶対ここを動いてはいけないと指示されました。朝なのに明け切りません。誰かが今何時かなと尋ねておられました。8時〇分だよーと、延焼でくすんでおり、本来なら学校へ行く時間だなと幼な心に感じたものです。

傷痕軍人さん、ものもらいさん、色んな人に出会いました。つらい思い出ですが、つきません。広島・長崎のことを思うともっともっと大変だったーと。